椰子の樹

長野県ニューギニア会会報

第６号

平成22年１月20日発行

長野市北長池1491

発行人　稲垣一良

印刷　神林印刷

新年のごあいさつ

会長　稲垣一良

明けましておめでとうございます。

若い頃、余り考えないで来た年齢も、新年を迎える度に今年もまた一つ歳を重ねると考えながら、喜寿をすぎた今日まで、元気で生きてこられた幸せに感謝しなければと感じています。

30半ばで出征し、南の島ニューギニアで飢えと病魔に苦しみ、銃弾に倒れ、肉親に看取られる事も無く果てていった父親の生涯を思うと、しみじみと戦争の無い平和な暮らしが大切かを知らされます。私達遺族は、犠牲になられた英霊のご供養をこれからも続けていきます。皆様のお力添えを今後共よろしくお願い致します。

2月の総会、7月の慰霊大祭、現地慰霊友好親善の旅は例年どおり行う予定でいますが、ニューギニア航空が週2便（現在1便）の認可を申請中と聞きましたので、認可がおりますと4泊5日の日程が可能となりますので、多くの皆様に肉親の墓参に詣でて頂きたいと願っています。

会報「椰子の樹」及びインターネット・ホームページの充実についても努力していきます。また、護国神社と約束の慰霊碑改修整備について、実行委員会を設置して検討していきたいと考えています。

終りに、皆様ご家族のご健康とご多幸をお祈り申し上げまして、年頭のご挨拶といたします。

第41回 ニューギニア方面戦没者慰霊大祭開催

昨年7月26日(日)、第41回ニューギニア方面戦没者慰霊大祭が松本市の長野県護国神社で行われ、いつものように来賓各位と会員・遺族（計約2百名）が参加されました。

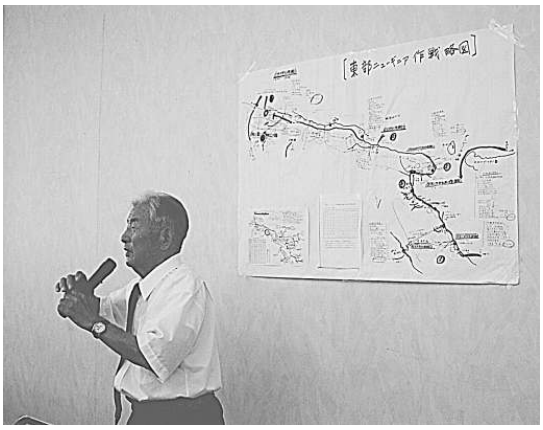
朝早くから到着した遺族の方がたは先ず「嗚呼戦友の碑」に拝礼、そして隣にある碑に刻み込まれた自家の英霊の名前を久しぶりに見て、故人を改めて思い出したりしたあと、本殿での行事までの時間を美須々会館でくつろぎました。

会館では、一緒に現地の慰霊巡拝をした仲間などが久しぶりに会って、いつもお茶や食事をしながら近況報告や想い出話に花が咲く午前中ですが、今年はこの時間を利用して、元会長の神谷さんから戦中の現地の状況についてお話しをしていただきました。

平成21年7月26日(日) 松本

神谷さんは、自分で描いた大きな紙の東部ニューギニアの作戦図を壁に貼りだして、一時間半ほど当時の状況を説明しました。広いニューギニアですが、当時239連隊の中隊長をしていたご自身の体験からその説明は詳細・正確であり、当時の苦しい戦いの状況が伝えられました。

会場の遺族の方がたからはさらにいろいろ質問が出されましたが、本殿での神事の時間も迫ったため終了、「いつも雑談で午前中が過ぎていたのが、非常に有意義な時間となったので今後もやってほしい」との希望が寄



説明をする神谷さん

せられました。

遺族にとって、故人はどのような場所で戦ったのか、日本軍の様子はどんなだったのか、等々、何度聞いてもよく分からないのがニューギニア戦の話です。神谷さんも「自分で歩いていないところのことはよく分からない」とのことです。

今後も各方面、各地の戦いで生き残った戦友の方がたから〝また聞きではない〟本人の体験話を聞かせて頂きたいものです。

定刻の正午より神社本殿で式次第に従って慰霊大祭が行われ、大祭終了後は、美須々会館でひとときの休憩や歓談の時間を過ごし、「また会いましょう…」とそれぞれの家路につきました。

来年も元気で大勢集まりましょう。

第32回 慰霊巡拝報告

団長　大日方辰夫

出発　「今年の慰霊巡拝に団長として行ってくれないか」と言われたのが出発２週間前のことで戸惑ったものの、現地経験者の都合がつかないとのことで引き受けた。ガイドを入れて全員で９人の小さな慰霊団のため、会の荷物は宅急便、私ともう一人はタクシーの相乗り、その他の人たちも９月５日各地から全員成田に集合した。

慰霊団の構成は、私以外では長野県内から２人、後の５人は、北海道、茨城、埼玉、岡山から。兄弟３人と親子のグループ、残りの３人は単身、私（27・28・30回の巡拝に参加）を除いては全員初めての方ばかりだった。

入国　６日、ポートモレスビー空港の入国検査は、人数に対して荷物が多すぎるということでたいへん厳しく、「手荷物以外は縛ってあるロープを全部外して中の品物を見せろ…」との命令、仕方なくガイドと二人で開梱を始める。何も怪しいものは入っていないが、再梱包のこともあり半分くらいで勘弁して貰う。

この後ウエワクまでの国内線はマダンで乗り換えとなり、荷物も積み換えで縛り直したものはロープが緩み扱いにくくなってしまった。

ウエワク　なんとかウエワク到着。お昼ご飯もそこここにコイキン観音へ。きれいに草刈りされており、疲れた我々を観音様は優しいお顔で迎えてくれた。世話をしてくれているバカラ一族６人が集まってきたので管理料やらお土産を渡した。

コイキンで土産を渡す

この後十八軍司令部のあった洋展台へ。現在は傍の教会が管理していて小屋に番人が居り入るのには料金（10キナ）が必要である。慰霊碑の上に乗せてある鉄兜は崩れかけていた。

洋展台の近くにある高射砲陣地跡、奥の方まで入っていくのはちょっと危険だということなので、見学は入口に近い一門だけだったのは、初めての方が多かったのに残念だった。

ウォーム岬から阿部岬へ、海岸でお焼香、その後、慰霊の森公園に急いだ。公園は改装中で、土台の上に工事材料が積まれている状態なので、やむなく右手にある政府の建てた石碑の前で慰霊の行事を行う。鈴木さんの慰霊の言葉が薄暗くなった公園の闇の中に吸い込まれて行った。赤道直下、南国の夕方は太陽が沈むと急速に暗闇に変わってしまう。

ソナム　翌７日はソナム行き。例によって前日に約束してある車がなかなか来ないのにイライラする。３日前の雨でぬかるみが多い道を猛スピードで走り、昼過ぎに到着した。

ソナムの慰霊碑はいつも綺麗に管理されていて世話をしてくれているピーター、ルーシー夫妻や村の人たちも参加して１時過ぎから慰霊祭を行った。碑の後ろにある水筒などの遺品類が前よりも少なくなっているのが気になったが、帰りの時間と川の水かさも心配で帰途についた。

ウエワクまでの帰り道、ブーツ飛行場跡に立ち寄る。１００機余りの日本軍飛行機が一夜に全滅したここは、今は見渡す限りの雑草に覆われている。

ウエワクに近づいて点々と集落のある辺りで車がぬかるみにはまり込んでしまい動けなくなった。これを見ていた村人が総出で助けてくれ１時間半もかかって脱出、お礼と言えば皆が持っていたオヤツを出し合って差し出す程度で申し訳ない。この国の人たちの優しさに感謝、暗くなってからようやくホテルに戻ってきた。

ウエワクのホテル、オーナーの川畑さん、何でもご自分でやっているが、お歳の関係もあってか、少し疲れておられる感じだった。

セピック　８日、日本軍がマダンからウエワクへ転進する途中で最大の難

所だったセピック河へ。昨日のソナムへの道と比べて快適な道だ。８時出発12時近くにアンゴラムの船着き場、ここからは一本の木をくり抜いた舟にエンジン（日本製）を付けた丸木舟だが案外安定も良く快適、この舟の中で弁当の昼飯を食べた。

アンゴラムから水路を30分ほどでカンバランバ到着、村はシンシンの練習中だった。河のほとりでせめてもの焼香、嬉しいことに村の人たちも出てきて一緒に祈ってくれた。ここではＴシャツや手拭いをプレゼントした。

鉄カブト　船着場の水先案内人が、「日本軍の鉄兜があるので80キナで売りたい」と話しだした。40キナまで下げてくるのでちょっとその気を見せたら「これから家に取りに行く」とのこと。出発の時間も迫り到底待ちきれないので「来年また来る…」と言って帰途についた。

今でこそ『雄大な自然』などと言えるが、何日も大湿地帯の中を腰まで水に浸かって転進し、飢えと病に疲れ果てて沈んでしまった兵士たち、この川底にいったいどれくらいの英霊が眠っているのか。「こんな戦闘をさせて…」と無謀だったアイタペ作戦が恨めしく思われる。

私にとってセピックは想像以上の大河だった。２時近くにカンバランバを出発、４時間余り掛かってホテルに帰ってきた。

マダン　９日。ウエワクからマダンに移動。ヤボブヒルの慰霊碑で法要を行う。ここもきれいに手入れがされている。ドミック君という少年が居て彼の父親がやってくれたそうだ。お礼に持ち合わせのＴシャツを持たせてやった。

落書　ヤボブヒルでの慰霊の後、アレクシスハーフェン近くの旧日本軍飛行場に到着。背の高い雑草に覆われた雨上がりの細い道を歩くといつもの飛行機の残骸。ところが驚いたことに、双発爆撃機の雄姿はすっかり変わり果てていた。胴体が前後二つに折れて、前のめりになってしまった無残な姿にしばし呆然となり言葉も出ない。そして、さらにたくさんの落書、英字のものに混じってなんと大きな日本語まで書かれていた。どこのどんな人が書いたのか。壊れながらも頑張っていたいままでの姿を知るものとしてなんともやり切れないショックだった。

心ない落書

翌10日はマダンの海の小クルーズで近くのシーア島に行く。この島にはまだ防空壕が残っていて、戦中は60人ほどの日本兵が駐屯していたそうだ。

帰国の途　11日はいよいよ帰国の途、ポートモレスビーへ移動。美しい国会議事堂の見学、水上部落とマーケットに立ち寄り、街の中は前回に比べて自動車が増えている感じだ。そして、12日にはそれぞれの想いを胸に一路北へ、成田へと飛び立った。

終りに　今回は私が緊急の団長となり経験の豊かな方が居ないという慰霊団だった。慰霊団としての慣例的な行動も全員が未経験のため少人数とはいえ話の行き違いもあり、私にとってはたいへん気を使った旅行になってしまった。しかし、全員が無事帰国できたことは何よりのことだった。

第32回　長野県ニューギニア会　戦没者慰霊団に参加して

茨城県　鈴木春雄

「ニューギニア巡拝」を決めたのは10年ほど前になります。定年退職したら一人で密かに実行する積りでいました。理由は、戦争の犠牲となってニューギニアで戦死した祖先の霊に出遭いたいと思っていたからです。以後、「なぜニューギニアまで遠征しなければならなかったのか」に始まる太平洋戦争の解明に取り組む日々となりました。

旅行準備の段階で地図・紀行探し、現地語、レンタカーと道路事情、マラリア対策、食料・宿泊事情などを調べつつ、「Google Earth」で空撮写真を見ては地形や地名などを確認する日が続きました。「ラスカル」対策をどうするかは最も悩ましい問題でした。目的地は「戦死地ハンサ」です。

ところが治安の悪化が重く圧し掛かり、実家の兄の意向もあって、個人旅行は止めこの度の第32回慰霊巡拝団に参加させていただくことにしました。

漸く涼しくなりかけた９月５日、日中気温35度という未踏の地への出発です。

１９４２年、日本海軍のポートモレスビー攻撃を契機に、米と豪の分断、絶対国防圏の維持等々で様々な作戦が展開され、東部ニューギニア戦線に16万人近くの兵が投入され、13万人近くが犠牲（厚労省資料：１２７、６００人）となったと聞きます。武器・弾丸どころか食料補給も無く、無謀な作戦

前列右より　近藤　鈴木（幸）　鈴木（忠）
丸山　鈴木（春）
後列右より　大日方
添乗員
富田（ふ）　富田（英）

コイキン観音像前

いでした。

団長以下総勢８名は、ウエワク、マダン近郊の戦跡、慰霊碑を廻り「慰霊の言葉、国家斉唱、焼香、遺族挨拶、合唱」等を厳粛な気持ちで行うことができました。原住民に管理していただいているコイキン観音像は「戦死兵の亡霊供養」に建てたものと伺い、そう言えば夜中のウエワクホテルのテラスで涼んでいる時に、眼下に広がる海の向こうから聞こえた呻き声は犠牲者の御霊の叫びだったのでしょうか。振り返れば二度の危難を乗り越え巡拝を無事終えることが出来たのは御霊に守られていたからでしょう。一度は「白骨街道」と呼ばれる砂利道を走る乗り合いトラックが泥濘に嵌り動けなくなったこと。（この時は、多くの原住民の共同作業でトラック救出）。二度目は、セピック河を舟外モーター付き丸木舟で航行中障害物に当たりエンジンが停止したこと（この時、舟底かスクリューかが破損していれば難破船に）。

セピック河を目の当たりにして第41師団歩兵部隊や輜重隊もこの河幅１キロにも及ぶ大河そして広大な湿地帯を荷物とともに渡河・横断してハンサ方面に行軍したとするなら、私には狂気の沙汰としか思えず想像を絶するものでした。

高齢者を含む巡拝の旅、長距離移動に使われた乗り合いトラックと、道路事情の悪さ、砂利道ならまだ救いもあろうが、川あり水溜りあり泥濘ありで、土埃りを舞い上げ60～80キロで突っ走る幌付荷台の硬い椅子に腰掛ける我々は、尾骶骨を突き上げ、前後左右に揺られ、振り落とされんばかりでしたが、団長から、激戦地「アイタベ」方向の「ソナム部落墓標」に向かっているこの道路は、日本軍がジャングルを切り開いて作ったものだと聞かされ胸に迫るものがあり、誰もが「兵士の苦労を思えば何のその」と思って耐えていたのではないでしょうか。

66年前に満州から南下して上陸したと同じウエワクの海岸に立って、「遠い家族に思いを馳せる故人の心境」を察してみると夕日が涙で一層眩しく見えました。上陸当時はウエワク一帯は椰子の森で未踏のジャングルの入り口、不帰の入り口ではなかったでしょうか。

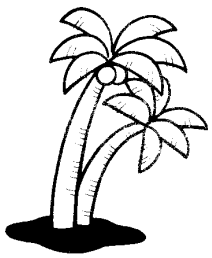
行く先々で、日本兵に味方してくれたであろう原住民の子孫に出会い、今も親愛の情を込めて我々を歓迎してくれる姿に感動しました。戦争に無関係な平和に暮らすこの地に勝手に土足で踏み込んでチンブンケ村事件のような殺戮もし、一方的に戦場に巻き込むなど到底許されるものではありません。

遡れば、大戦勃発前の昭和16年１月に大本営参謀本部将校が「南方鉱物資源の確保、兵站基地の確保」の踏査に来ており、その報告資料を見た大本営が南進を決定する大きな要素になったと言われています。ともあれ、この地にも市場経済が押し寄せるのは時間の問題としても、平和に暮らしている原住民に接して安堵し癒されたのは私だけではないと思います。代償として我々は今後この国に対して国家レベルで何かしなければ、また個人として何ができるのだろうかと考えます。そして、戦争は二度としてはならない、これを子孫に語り継ぐ責任があると痛感しました。

「戦死地ハンサ」には残念ながら行けませんでしたが、ヤボプヒルの忠魂碑にその祈りを捧げました。会の巡拝旅行だからこそ出来た現地人とのコミュニケーションなどに感謝しつつ、まだまだ知りたいことがあり防衛省資料や、口を噤んで当時を語ってくれない生還元軍人に会って体験談を聞くことが今後の私の課題です。

最後に団長、班長ほか参加の皆様、添乗員の方には大変お世話になりました。有難うございました。

命令のもとに飢えと病気に苦しみ命を落とした兵士の眠る地、「ジャワの極楽ビルマの地獄生きて帰れぬニューギニア」とまで言われた地、「生きて帰れぬ」どころか未だに遺骨が眠るこの地に初めて降り立つ緊張感に足が竦む思



第32回

東部ニューギニア 慰霊巡拝に参加して

岡山県　近藤美由紀

私は幼い頃より、祖母に戦争の話をよく聞いていました。

当時、通っていた小学校の登り口に防空壕の入り口があり、山の反対側の変電所に貫通している事、中では飛行機の部品も作っていた事、お接待でお菓子をもらいに行ったお地蔵様あたりまで続く大きな穴が今でも空いている事、防空頭巾を被り、サイレンが鳴ると入りに行く事など。

それら全てが私の遊び場でした。

平和な暮らしがあたり前の私には非現実的すぎて、他人事の様に聞いていました。

何故、今の才になって現地へ行こうとしたのか自分でもよくわかりませんが、ふと、親族に看取られていないのは祖父だけで、詳細がわからなくても、せめて現地へ行き、手を合わせてあげなければと思ったのです。

長野県ニューギニア会の皆様と知り合う前までは、現地の治安の悪さや交通の不便さに不安を抱いていましたが、祖母は九十二歳で出来るだけ早く報告をしてあげたいとの思いに調べていたら、快くお仲間に入れて頂け、安心して決断できたのです。

成田空港から首都ポートモレスビー、そしてマダンを経由し、ウエワクへ。

空港もどんどん質素になり、現地の方々の肌の露出も増していき、村と呼ばれる所は、貧しいですが決して不幸そうではなく、誰もが輝く程の笑顔で挨拶をしてくれます。

畑を耕し、沢山の作物を作っています。バナナや芋類がたわわになり、海や川では魚もとれ、食べる事には苦労はなさそうでした。

そして、そこかしこに建てている慰霊碑はとても綺麗に保たれています。

村人達、子供達までもが、清掃をしてくれているなんて頭の下がる思いでした。

日本軍が戦いながら作っていった道路は、アスファルトではありませんが、ジャングルを切り開き、車が対向できる道になっていました。それでも途中、川を渡ったり、あちこちにある穴で私達の乗ったトラックはガタガタと揺れ、ぬかるみでは約一時間、足止めされてしまいました。

海かと見間違う程の広大なセピック川、十人は乗れるカヌーに乗り、茶色の川を滑走。

兵士達は泳いで渡るなどし、力つきて水死された方もいるとの事。

上陸した村では、川辺にお線香をたてさせて頂きました。

ウエワクからマダンへ移動し、連合軍の戦車や高射砲、爆撃機「呑龍」という日の丸がまだ薄く残る飛行機残骸等を見学、空襲で大穴があき、池になった所ではマラリアの原因となるハマダラ蚊を目撃。

この恐ろしい蚊によって沢山の命が奪われたのかと何とも言えない気持ちになりました。

この慰霊の旅は、現地の方との交流も目的の一つと聞き、つたない英語とピジン語の挨拶で積極的に話しかけていきました。

時には誤解したりさせたりで、自分の未熟さに悔しい思いもしましたが、バレク自然保護区では村の子供達と草笛やゴム跳びで遊び現地のゴム跳びも教わり、お母さん方には普段の生活や花の名前を教わる等、楽しい会話が出来た事も良い思い出です。

マダンやポートモレスビーは、ホテルも立派で食事も豪華ですが、私の中ではウエワクが一番でした。でも、ホテルは粗末だし、快適とは言えない車にボコボコの道。不衛生なトイレ。

でも周りは、どこまでも続くジャングルと広い海に川。色とりどりの花、鮮やかな鳥。それこそが、原色の世界、パプアニューギニアだと思います。

こんな最後の楽園と呼ばれるに相応しい所で無残な戦いがあったのか…。

輝く程の笑顔をもった現地の人々も巻き込んで…。

弾薬も補給も体力さえも失っていき、途方に暮れる中で何を思ったのでしょうか。

人の命を消耗品の様に扱う戦争からは何も生まれません。

早く世界中が争いなく、平和になる時を願ってやみません。

今回の日程中に母の命日があったり、帰国一週間後が祖父の命日だったりと、この時期に慰霊の旅に出かけた事に何か因果があったのでしょうか、英霊や神仏等のご加護あって皆が無事に帰国する事が出来ました。

最後になりましたが、慰霊団団長を始め、団員の皆様、長野県ニューギニア会の役員、会員の皆様のお力添えあって、私は安全に行って来れた事、深く御礼申し上げます。

現地で知り合い、笑いあった人達にも又、逢いに行けたらと思っています。

ウォーム岬

ニューギニアから遺骨７０２柱が帰還

昨年12月17日、東京千鳥ヶ渕戦没者墓苑でニューギニアから帰還した戦没者の遺骨の引渡式が行われ、政府派遣の東部ニューギニア収集団から４１１柱、インドネシア収集団から２９１柱、合わせて７０２柱の遺骨が今回新たに厚生労働省に引き渡されました。

千鳥が渕戦没者墓苑に入場する遺骨収集団

東部の収集団には当会会員の大日方辰夫さん（小川村）も参加しています。西部団を案内した岩淵さん（岩手県）によれば、ニューギニアにはまだまだ多くの戦没者の遺骨が、山野に埋もれたまま放置されているとのことです。

厚生労働省を代表して挨拶した官房審議官は、「今後も民間団体と連携して遺骨収集を続けます」と述べていました。

（引渡式に出席した荒井会員の報告）

※なお、この記事について詳しくは会のホームページをご覧ください。

総会のお知らせ

第42回通常総会が左記要領で開催されますのでご案内いたします。

記

日時　平成22年２月11日㈷
　　午後２時より

会場　浅間温泉ホテル井筒

多数の会員の皆様のご参加をお待ちしております。

ご寄付ありがとうございました

昨年の６月にご寄付をお願いしたところ、２７０名を超える方から多額のご寄付を頂戴いたしましたこと厚くお礼申し上げます。金額は２月の総会で報告し、寄付者の氏名は紙面の都合で次号に掲載しますので、ご了承くださいますようお願いいたします。

慰霊巡拝団募集

今年も現地へ巡拝団を派遣することになりました。東部に限らず西部を含めて希望される方は、早めに事務局までご連絡をお願いします。

まだ確定ではありませんが、３月のニューギニア航空ダイヤ改正で５日間のツアーが可能になるかも知れません。詳細は総会及び次号にてお知らせします。ご希望される方は、渉外担当原までご連絡をお願いします。

０９０　１４２６　３９０７

会のホームページを刷新

今年２月の総会で不備を指摘されたニューギニア会のホームページが、会員の皆さんの支援と新たに組織されたホームページ編集委員会の活動によって刷新されました。

新しいホームページは新しい編集委員の新鮮な感覚と外部のＷＥＢ専門家の技量によって、従来の内容を引き継ぎながら、ページ構成を一層整理するとともに、適時の更新ができるよう体制を確立しました。

新しいホームページも『長野県ニューギニア会』を検索すれば簡単に見つけることができます。

会員の皆さん、若い方の助けを借りてでも、是非一度閲覧してみてください。

編集後記

●昨年の現地巡拝で突然の団長役をお願いした大日方さんからレポートを頂きました。大日方さんは政府派遣の遺骨収集団で再度の渡航が迫っていて多忙のため、メモで頂いたものを編集しました。初めて参加の鈴木さん、近藤さんのものは、新鮮な感激が貴重だったのでほとんど原文のままで掲載。三人分のスペースを作るため今号は増ページとなりました。

●マダンの飛行機の落書きはショッキングな報告です。あの飛行機は遺族たちにとってマダンの象徴でもあり、何とも腹立たしくも悲しい報告でした。慰霊巡拝で全国から訪れる遺族の行為とは考えたくない出来事です。

●松本の慰霊大祭で神谷さんのライブが歓迎されました。60数年前の現地のことが生々しく伝わります。大祭に出席される戦友の方がただけができることです。どうか『語り部』となって遺族にお話を聞かせて下さい。（竹村）